

僕らの花道

特集

Special Feature

——内子こども狂言くらぶの軌跡——

コロナ禍で生じた伝統文化の空白は、私たちにどんな影響を与えているのでしょうか。文化と呼ぶにはまだ日の浅い「内子こども狂言くらぶ」の取り組みが、日本の伝統文化である「狂言」の扉となり、その価値を気付かせてくれます。

11月に開催された「うちこ狂言の夕べ」は、たくさんの方の思いとつながりで生まれた新しい舞台。こんな時代だからこそ、失ってはならないことが垣間見えた、すてきな公演でした。

町の誇りとアイデンティティ、そして人間らしい心の豊かさ——逆境で新しい魅力を見つけた内子こども狂言くらぶの取り組みから、なぜ伝統文化が大切なのかを考えます。





内子こども狂言くらぶの演技

1_「かみあそび」の一場面に出てくる上芳我邸を背景に演じる子どもたち2_登貴姫の幽霊が京の者たちを内子の旅に導く 3_いかざき大風合戦は紙文化を伝える 4_「猿聲」の一場面5_堂々とセリフを言う姿に感動



会場の様子とその他の演目

6_上芳我邸の中庭に設置された舞台。ライトで浮かび上がる歴史的な建物と、子どもたちの影。漂う空気感には内子座とは別の良さを感じる趣のある舞台になった 7_大人の部の演目は「呼声」。徳田幸治さん、稲月道隆さん、高校生の宮崎大知さんが舞台に立った 8_プロの狂言師は「蝸牛」で会場を笑わせた 9_雨が降る中、公演を見つめる観覧者。最後まで大きな拍手が鳴り響いていた

子どもたちに新たな舞台、「うちこ狂言の夕べ」

歴史が見守るこども狂言

毎年、秋に開かれる「茂山狂言内子座公演」。今年は新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の影響で、場所を木蠟資料館上芳我邸の中庭に変えて行われました。演目の一つ、新作狂言「かみあそび」の一場面で登場する上芳我邸。臨場感あふれる舞台で行われた狂言には、笑いと感動、この町が守ってきた歴史の素晴らしさが詰まっていました。

白壁となまこ壁の屋敷を背景に「うちこ狂言の夕べ」を開催

「やいやい、その櫓（き）の実（み）は表の蔵（くら）に入れい」「このお屋敷（おく）のお方でござるか？ さてさて見事なお屋敷でござるのお」――。

内子町の木蠟生産の基礎を築き、その発展の中心となった芳我家の屋敷に子どもたちの声が響いています。内子座で毎年行われている狂言公演が11月1日、初めて木蠟資料館上芳我邸で開かれました。今年の公演の主役は、内子こども狂言くらぶ。大蔵流狂言師の茂山千三郎さんと鈴木実さん（みづの）から狂言を学ぶ21人の子どもたちです。内子座創建100周年を機に始まり、今年7年目を迎えました。

子どもたちが演じたのは「かみあそび」と「猿（さる）聲（こゑ）」の2演目。「かみあそび」は茂山さんが作った内子町が舞台の新作狂言。江戸の者と京の者が、伊予国の内子へ旅することになり、町のにぎわいや名産物に触れながら、この地に導かれた理由を知ることになる、というあらすじです。100周年記念事業では京の者を茂山さんが、江戸の者を野村万蔵（まんぞう）さんが演じました。大蔵流と和泉流、そして地元の子どもたちが同じ舞台に立つ初

めの試みは、歴史に残る公演で私たちの誇りとなりました。

曇り時々雨の公演。心は、曇りのち晴れ――

今年、猛威を振るったコロナの影響で、内子座の町主催公演は3月から10月末まで全て中止。こども狂言は先行きの全く見えない状況が続く中、感染のリスクを回避できる屋外での開催が提案され、重要文化財である上芳我邸の中庭で上演する運びとなりました。

公演当日は、ときどき雨がぱらつき、屋外公演の難しさがあらわになりましたが、子どもたちは集中力を切らさず、堂々とした演技を見せてくれました。最後の演目で雨脚が強くなったときも帰るお客さんはなく、雨音を消すような大きな笑いと拍手が起きます。観客の一人は「上芳我邸の雰囲気です。特に今年はコロナで大変だったから、どれだけ多くの人が心を砕いてこの舞台を作ってくれたかと思うと、感動が込み上げてきた」と満足した様子です。

内子町の文化と誇りを伝える子どもたちの狂言は、人々の心の中のモヤモヤを、笑いと雨と共に洗い流してくれました――。

5_公演日の前日に板材などを搬入するスタッフ 6_細かい部材は現場に合わせて山本さんが作った 7_山本さんが考案した組み立て式の舞台。半日ほどで仕上げて、リハを行った 8_当日、降り始めた雨に気付く山本さん 9_開場直前に濡れた椅子をスタッフ全員でふいた



9月の後半。敬老会など、町内のイベントが軒並み中止になる中での決定でした。担当課である町並・地域振興課の林慎一郎課長は「狂言の力で町を元気にしたいと、みんなが思っていた。上芳我邸の庭園ならコロナ対策にもなるし、未来に向けてのメッセージにもなる。何より、新しい挑戦は子どもたちのモチベーションの維持につながる」と当時の心境を話します。

強い思いが生んだ一体感

当日の天気予報は曇りのち雨。安全策で内子座に会場を移すという選択もありました。でも、「上芳我邸での狂言を見たい」という思いが、屋外での開催を後押しします。開場直前に小雨が降りますが、スタッフ総動員で対策し、雨が上がると祈りました。

保護者の一人は「コロナで先生の手が足りないため、初めて衣装の着付けなどを手伝った。雨の心配など大変だったけれど、舞台裏の一体感がすごくよかった。スタッフも子どもたちも短い期間で頑張って、感動の舞台だった」と喜びました。



内子手しごとの会長
山本 勝美さん

Interview 実行委員として舞台制作を担当

きっと自分も生涯忘れない最高の舞台

7年前から子どもたちの頑張る姿を見してきました。コロナで内子座での開催が難しい中、関係者一同が「内子座以上の舞台を用意してあげたい」という思いで協力し、上芳我邸の舞台が出来上がりました。

重要文化財での舞台づくりは「勾配や段差のある地面に水平な舞台にすること」や「1日で設置し、1日で撤去すること」など、難しいことが多かった。軽い杉材を使ったり、組み立て式にしたり、さまざまな工夫でなんとか形になりました。

途中から雨が降りましたが、お客さんは舞台に熱中し、一人も帰る様子を見せません。帰り際には皆さんから「ありがとう」と声を掛けてもらいました。片付けを手伝ってくれる人もいて、感動しました。

周辺の町並保存地区に住む人々の姿もありました。こども狂言と古い町並み。皆さんと大切にしてきたものの共演で、感動を共有できたことが最高でした。公演を見届けた人たちの拍手と笑顔、子どもたちにもずっと覚えていてほしいです。

この舞台はたくさんの人の思いで生まれた――

感動を生んだ公演の舞台裏

目標にしていた「東西狂言2020inとしま」の中止が決まり、肩を落とした内子こども狂言クラブのこどもたち。頑張ってきた子どもたちのそんな姿は見たくない、大人たちが立ち上がります。新しい公演開場は、子どもにとっても大人にとっても挑戦の場でした。みんなが団結して作った一つの舞台。その裏側を追いました。

コロナ禍の葛藤と決断

茂山狂言内子座公演の実行委員会は、厳しい判断を迫られていました。6月までは緊急事態宣言が解除されましたが、国から新しい生活様式が示されるなど、大きなイベントは控える流れになってい

しかし今年4月、いつもは稽古が始まる時期ですが、コロナの感染拡大に伴い緊急事態宣言が出されるなど、子どもたちは狂言どころか学校にも行けない状態が続きます。そして「東京オリンピック2020」の1年延期が決定し、東京公演の開催も断念することになりました。

令和元年10月5日、「茂山狂言内子座公演」を終えた子どもたちの楽屋は沸き立っていました。舞台の熱が冷めやらぬまま、東京オリンピックの応援プログラムなどに認定された「東西狂言2020inとしま」(以下、東京公演)の選抜メンバーが発表されたからです。選ばれた子はもちろん、他の子たちも残りの枠に入ろうと張り切っていました。



1,2_ マスクやフェイスシールドを
しての稽古 3_ 舞台裏を支えた保
護者の皆さん。鈴木先生が着せ方
を伝える 4_ 出番を待つ子ども
たちに声を掛ける鈴木先生

たからです。実行委員会では「文化を途絶えさせない」という思いから、公演開催の決定は先延ばしにし、子どもたちの安全対策を図った上で稽古を始めることを決めました。

公演の開催が決まったのは



大蔵流狂言師
鈴木 実さん

Interview 7年間、茂山千三郎さんと共に子どもたちを指導

子どもたちの成長を見るのが楽しみに――

能楽は一期一会。その土地その土地、その瞬間その瞬間、1回きりの舞台が魅力の1つです。そんな中、内子町の継続的な取り組みは、私たちにとっても貴重な経験になっています。公演前、準備していた高校生たちの衣装が昔の小さい衣装と並んでいるのを見たとき、「もう7年も続いているのか」と感慨深いものがありました。

今年、子どもたちは通常のワークショップではたどり着けない領域に踏み込んでいます。コロナの影響で稽古の開始が遅

くなりましたが、今まで以上に集中して頑張ってくれました。暑い中でのフェイスシールドなど感染症対策が大変でしたが、楽しい稽古をモットーに最後までやり遂げることができました。本人たちが狂言を楽しむ姿を見て、お客さんも楽しんでもらえたらうれしいです。

上芳我邸という新しい舞台でも、堂々と狂言を演じる子どもたちの姿に成長を感じます。この経験に自信を持って、これからの人生を生きてほしいです。

ずっと歩んでみたい狂言の道——

徳田さんと稲月さんと一緒に狂言ができて楽しかったです。徳田さんが本番中に面白い顔で笑いを取っていたので、僕も負けられないと声や動きにアドリブを加えてみました。最初はセリフが飛んでしまいましたが、思い出に残る舞台になりました。

狂言を続けられる環境を作ってくれた皆さんに感謝しています。特に役場の林慎一郎さんには感謝できません。こども狂言は最初、小学生だけのものでした。僕たちが中学、高校と進学するたびに、林さんが道を開いてくれて背中を押してくれました。「続けたいという気持ちは迷惑」と思っていたので、それがなければ狂言をあきらめていたと思います。

今、プロの狂言師になりたいという夢を持っています。勉強を頑張って、茂山先生に教えてもらえる学校を目指したいです。一期一会を大切にしている狂言ですが、僕にとっても大切な出会いになりました。これからもっと舞台を踏んで、セリフが飛んでも笑いに変えられるようになりたい。そして、お客さんとの出会いを大切にする狂言師になりたいです。



内子こども狂言くらぶ

宮崎 大知

Taichi Miyazaki



(左)「呼声」の本番中。大人たちに負けまいと熱が入る宮崎さん

(右) 小学5年生の時の初舞台。まだ初々しい宮崎さん(奥側)

新しいステップには土台が必要

伝統文化に触れていると「日本の心」みたいなものを学べます。例えば落語では「縁を大切に」という思いから、お客さんに布などの切れ目を見せないなどの心使いがあるそうです。こども狂言では一流の先生たちの姿から、道具を大切にすることや裏方の人たちの苦勞を知って思いやることなどを学んでいます。先生が注意することの一つ一つにも意味があるので、子どもたちはその意味を感じ取ってほしいですね。

昨年、高校生になった大知くん。小・中学生と稽古の時間帯が変わるので、自分たちも一緒にしようと「大人の部」を作りました。続けるかどうかは、その子たちの道ですが、私たちが狂言をすることで、基地のような役割を果たせるのではと思いました。将来、大人になった子たちが先生になって教える可能性もあります。こども狂言をしている町は他にもありますが、内子町はもう一つ上の段階に行けるのではと期待しています。この町から狂言師が生まれる夢を、私たちも一緒に見たいです——。



内子おとな狂言くらぶ

徳田 幸治

Kouji Tokuda



(左) 本番前に楽しそうに練習する「大人の部」の3人

(右) 劇団オーガンスの役者としても活躍する徳田さん

伝統文化の扉を開いた「内子こども狂言くらぶ」

この道の先にある夢は——

内子こども狂言くらぶに託された夢は、7年の歳月を経て、子どもたちの夢を生み始めました。そして、この取り組みに関わる大人たちの夢にもつながり始めています。町の伝統文化を生む力は、この夢の連鎖なのかもしれません。

内子こども狂言の新しい一歩——

「内子の文化に狂言を——」。広報うちこの記事で、そう語ってから5年が経ちました。小学生だった子どもたちが中学生や高校生になり、今も狂言を続けています。メンバーは入れ替わりましたが、世代を交代しながら狂言が町に定着してきました。昨年からは高校生を盛り上げようと「大人の部」も作られました。今回、宮崎大知くんが町の大人たちと狂言の舞台に立ったことは、本当に素晴らしいことです。自立した継続が町の伝統文化になる入り口。その扉を開くことができたのです。今年、狂言公演を実施できた



大蔵流狂言師
茂山 千三郎さん

ことは、大きな意義がありました。コロナの影響で子どもたちが目標にしていた夏の東京公演は中止。11月の公演も開催が危ぶまれていました。感染リスクをなくすことなど、さまざまなハードルがある中、最高の舞台を用意してくれた皆さん。その思いに舞台で応えた子どもたち。特別な状況、場所、舞台が生んだ新しい狂言に、町の力を改めて感じました。子どもたちには、この町で生まれ育ったことを誇りに思っ、この狂言を演じ続けてほしいです。

中、子どもの声が響く公演には笑い感動がありました。喜劇である狂言を子どもたちが元氣いっぱい演じること、町の人たちが「笑っているよ」「元氣でいよう」と思ってくれたらうれしいです。こういう時代だからこそ、人と人をつないでくれる文化を大切にしたいですね。最後の演出で雨が強く降りました。それでも見続けてくれるお客さんを見て、スタッフ一同が感動しました。この舞台と一緒に作り上げようという一体感——町の文化に狂言を根付かせたいという夢の形が、少しずつ見えてきたような気がします。



内子座創設100周年事業でこども狂言の立ち上げを伝えた、平成27年12月号の特集「芝居小屋のある町で育つ子どもたち」

僕らの花道



改修工事のため調査が始まった内子座の様子。「未来に残すためには耐震工事など、その時代時代に必要な手を加えないといけない。内子座も伝統文化もそうやって今につながれている。文化として残るには、必要とする人がいることも大事」と徳永先生は言います。

この町に息づいた文化芸術の心——

100年の思いを 100年先につなぐ

内子こども狂言くらぶには、今の子どもたちに内子座での思い出をたくさんつくってほしいとの願いが込められています。内子座100周年記念事業に携わった専門家・徳永高志さんに内子座と文化芸術という視点で話を聞きました。

内子座を飛び出したこども狂言を見て、文化芸術を欲して内子座を建てた100年前の町民に思いを巡らせた——

今も残る町民の思い

100年前、内子座を建てるために200人もの町民がお金を出し合いました。それだけの人がこの町に劇場が欲しいと願っていたことに驚きます。内子町は大正時代までに交通の要衝として産業が発展し、町は潤っていました。足りなかったのは劇場。つまり内子座は、文化芸術を町に息づかせたいと、

町民が協力して建てた町の宝なのです。その思いは今も受け継がれ、町の娯楽の殿堂として、文化芸術を愛する町民の心を育んでいます。

続けられるから文化になる

内子座は建設当時、最新式の劇場でした。床下のセメントや西洋の建築技法を採用したトラス屋根、電気も通っていました。



慶應義塾大学大学院非常勤講師

アートNPOカコア代表

徳永 高志さん

内子座創建100周年事業実行委員会の委員長。内子座、長野県茅野市民館、淡路人形座のほか、伊予市や神戸市の文化政策に関わっています。著書に『公共文化施設の歴史と展望』（晃洋書房）など多数。

た。その時代時代に合わせることで大切で、文化も同じです。時代に合わせて少しずつ変わる必要があります。大蔵流狂言師の茂山千三郎さんは常に新しい挑戦をしている人です。狂言の伝統を維持しながら、新しいものも取り入れています。内子町のために作ってくれた新作狂言「かみあそび」は、まさに現代に生きる狂言。伝統文化とはそういうものだ、町の人々に感じてほしいと思います。それを実感できる場があるというのは、本当にうらやましいですね。

元々、内子町には狂言を見る文化はありません。でも、縁がありました。縁が広がって、そこから広がるのはいいことです。続ける人がいるから、つながって広がって行く。何度も繰り返して豊かになっていけば、それは文化になります。

こども狂言に込められた願い

私は内子座創建100周年記念事業の実行委員長を務めていました。そのとき町の人から出た意見は、「子どもたちを主役にした」「1回きりになるようなことは止めよう」というものでした。100年先の子どもたちにも内子座に、文化芸術に、親しんでほしいという思いです。そして、内子座での思い出をたくさんつくってほしいという願いから始まったのが、こども狂言でした。

文化芸術の素晴らしさは、違う世界を知ること。自らがのぞくこともできます。外側からと内側からとでは、見える世界は違います。舞台に立って狂言の世界を内側から見ている子どもたちは、私たちと違うものを感じ、より深く知ることができています。いろいろなことにつながる貴重な経験です。

100年前から文化芸術を欲し、育て、大切にしてきた内子町だから広げられる世界。多くの子どもたちにその世界を体験してもらって、人生を豊かにしてほしい。そして町の思いをつないでほしいです。



僕らは狂言と出会った

一期一会で見える世界が変わった子どもたち――

「狂言」と「子ども」の一期一会。一生に一度の出会いを大切にしたい子どもたちは、どんなことを得たのでしょうか。内子こども狂言くらぶの中から、5人の子どもたちに上芳我邸での公演の感想や、狂言に対する思いなどを聞きました。

あこがれの先輩に
囲まれて緊張の舞台



森川 路仁くん
(五十崎小4年)

僕は「猿蓑」の太郎冠者役をしました。セリフは「きゃきゃきゃ」ですが、何て言っているか想像しながら会話をしなければいけません。みんなを出迎える時にあいさつする「きゃきゃきゃ」が一人一人全部違うので難しかったです。練習をたくさんして、喉がかわることもあったけれど、本番は上手に言えました。みんなから褒めてもらって、うれしかったです。

城戸景道くんの舞が格好良かったです。僕にはまだ無理だけど、頑張って狂言を続けて、いつか景道くんのように舞ってみたいと思いました。

すごい経験ができる
内子で育ってよかった



一宮 もこさん
(内子中2年)

内子座の公演も好きだけど、上芳我邸の舞台も感動しました。少彦命役で「あのお山の天神社に」と指さして言うセリフに臨場感があってよかったです。大役を任されることが多いので、これからも信頼に応えられるように頑張りたいです。

眞子さまに演技を見ていただいたり、金剛能楽堂の舞台に上がったり、狂言ではいい経験ができました。内子座などの歴史が守られているからこそこの狂言で、この町に生まれたことを誇りに思います。狂言も町並みも未来に引き継ぎたい、私たちの大切な文化です。

狂言ができる喜びを
皆さんへの感謝に



城戸 景道くん
(五十崎中2年)

今回の公演では初めて、豪華な衣装を着て、舞をさせてもらいました。衣装の重さや袖の長さが練習着と全然違うので戸惑いましたが、無駄のない動きやきれいな構えにも意味があることを改めて学ぶことができました。笑い以外にも奥深さを感じ、また狂言の好きなどが増えました。

上芳我邸の会場が1日で出来上がったのを見て、大勢の人たちのおかげで自分たちが狂言を楽しめていると気付きました。来年は受験生だけど、感謝の気持ちを忘れずに頑張りたいです。

狂言で実感した、
挑戦は発見と成長



大野 春陽さん
(内子中3年)

初めての舞台は小学3年生のとき。緊張でガタガタだったけれど、演技が始まると世界に入り込んで楽しかったことを思い出します。2年目からはワクワクして、公演が終わるとすぐ次の舞台に立ちたくなっていました。

来年からは高校生。やり続けたい気持ちはあるけれど、進路によってはできなくなるかもしれません。でも、この7年間で苦手なことも頑張ればできるようになると実感しました。狂言で経験したことを生かしながら、これからもいろんなことに挑戦したいです。

共に喜び合えた舞台
みんなと先生に感謝



小西 元気さん
(内子高校1年)

内子座100周年で千三郎先生と野村万蔵さんが演じた旅人を、僕と西原虎大くんとでしました。先生たちと同じ役ができてうれしかった反面、表現力や表情が豊かなプロのすごさを改めて感じました。

僕は大学進学を目指すので、狂言は来年まで。最後は先生たちのように、アドリブで笑いを取って気持ち良く終わりたいです。そして、ずっと優しく教えてくれた先生たちに感謝の気持ちを伝えたいです。狂言をやめたらきっと寂しくなるけれど、後輩たちのやっている姿を見守りながら応援し続けたいと思います。

日本の伝統文化は、自然との調和や人々のつながり、知恵や技術、美意識などさまざまなのが織り込まれた先人からの贈り物です。その大切なものが今、ライフスタイルの変化や担い手不足、コロナ禍の長い中断などにより、どんどんと衰退しています。

内子町の文化と呼ぶにはまだ歴史が浅い。「内子こども狂言くらぶ」。

しかし、狂言に触れながらふるさとを見つめ直し、新たな魅力を創造する活動は私たちに気付かせてくれました。

伝統文化は地域の子どもたちを育み、地域の人々をつなぎ、新しい世界を生み出し、

町の未来を作っていることを――

心豊かな子どもたちを育てることは、町や文化を豊かにすること。たくさんの人とのつながりが生まれる伝統文化はこんな時代だからこそ、失ってはならないのです。

本来、狂言が行われる能舞台には花道はありません。内子座で生まれたこども狂言だから、花道を使った演目が生まれました。

辿ってきた道を振り返り次の一步を考えたら新しい道が必ず開けるはず――上芳我邸の公演は、私たちにそんなメッセージを送ってくれている気がします。



特集 Special Feature

――内子こども狂言くらぶの軌跡――

僕らの花道宛